

澁谷 鎮明*

Shizuaki SHIBUYA *



朝鮮時代の地誌と地理書にみる「水口」概念

Sugu Concept of Topographical and Geographical Books in the Chosun Dynasty

1. はじめに

中国起源であり、朝鮮半島、ベトナム、沖縄等、東アジア全域に広く伝わった風水地理思想は、陰陽五行や「気」概念など東洋思想を基盤として、住居や墓の造営に良い場所や方位を探ろうとするものである。風水地理思想は、その目的が子孫繁栄や開運などを示す「発福」を目的としているために、前近代的な、取るに足らない「迷信」として排斥されることもある。しかしながら風水地理思想は、東アジアにおいてかつて広く通用し、体系化された伝統的な地理思想であり、墓の造営などを通じて、人々の精神世界と深くかかわる側面を持っているため、東アジアの歴史地理学的研究にとって重要である。

特に、朝鮮半島を含む多くの地域では、上述の良い場所や方位を探るためだけでなく、風水地理思想に由来する概念や用語が、地形の把握や表現に用いられ、地誌、地理書、古地図等の歴史的資料にあらわれることも多い。風水地理思想は、「気」概念を主体としながら大きく地形を見て「良い場所」を選定する形勢学派と、陰陽五行説や易に依拠しながら「良い方位」を探る原理学派に分かれるが、このような地形表現を持つのは、主として前者である。

形勢学派の風水は、ある種の立地論とも言え、主として「気」の発現として地形を観察し、適切な「気」を受けることのできる地点を占定する。このような「気」が供給される良い場所の周囲は、風が吹くと散らばってしまう「気」を

滞留させるために山や水で囲まれている必要があるとされるが、この中で山に囲まれた小盆地から河川が流出する地点を風水では「水口」と呼び、重視している。

このような地形を示す「水口」概念は、風水地理思想の学術的評価が行われ始めた1990年代以前には、研究の対象として注目されることが少なかったが、近年韓国において取り上げられることが多くなっている。しかしながらこの水口概念だけを論じた研究は少なく、また少なくとも日本においては、あまり中心的に取り上げられたことのない風水用語である。

そこで本稿では、朝鮮時代の地誌や地理書、あるいは古地図などの資料にあらわれる、朝鮮半島における風水地理思想の水口概念についてその特性を明らかにしたい。またこれを軸としながら、現代韓国社会における水口概念の再評価と、東アジア全体での位置づけについても論じたい。なお、本稿において取り扱う資料のうち、『山林経済』、『増補山林経済』については東洋文庫所蔵のものを、また『林園経済志』『邑誌』は韓国で出版された韓国の垂細垂文化社出版の影印本を利用した。

2. 朝鮮半島における風水地理思想と「水口」概念

東アジアに広がる風水地理思想は、上述のように「気」概念を主体としながら大きく地形を見て「良い場所」を地形から判断する形勢学派と、陰陽五行説や易に依拠しながら「良い方位」

*中部大学国際関係学部国際学科

を探索する原理学派に分かれる。冒頭にものべたように、本稿で取り扱う風水用語としての「水口」は、基本的には前者の脈絡の中で現れる。

また風水は、これらの二つの流派による分類以外に、立地、方位判断を行う対象によって三つに分けられることがある。すなわち、死者の住まいである墓地や王陵を対象とする陰宅風水、生者の住まいのうち家屋や建築物を対象とする陽宅風水、集落や都城を対象とする陽基風水の三つである。風水を考える際に、大きく分けて「二つの流派・三つの対象」があると言って良い。こう考えるならば、例えば日本の場合、風水は「家相」のような形で、「方位判断+陽宅」に特化して行われてきたと言えるだろう。それとは対照的に、朝鮮半島の風水においては、「地形判断+陰宅」もしくは「地形判断+陽基」が良く扱われている。本稿で取り扱う水口概念は、朝鮮半島のように「地形判断+陽基」を論じる際に登場しやすいと思われる。

その理由は、地形判断を主とする朝鮮半島の風水の論理と特性から理解できる。朝鮮半島における風水地理思想は形勢学派の影響が強いとされ、「良い場所」を探索するための方法も、地形を「気」に変換して判断するものが多い。その際に水口は、良い「気」が得られる場所の周囲の山々のあり方を説く「蔵風法」の中で示される。地中を流れる「気」が供給され、地表に出

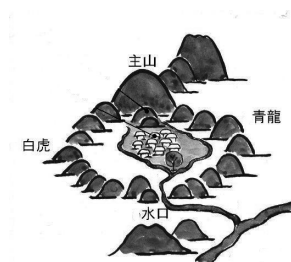


図2 「水口」の狭まった小盆地

る「穴」(図1参照)の周囲は、その「気」を漏らさぬために山々に緊密に囲まれている必要があり、結果的に図2のような小盆地が選好される。その小盆地からの川の流出点に当たるのが水口である。基本的にはこの「水口」に周囲の山々が迫り、狭まっている必要があるとされる。

朝鮮半島の風水に関する韓国で最初の本格的な学術書とされる崔昌祚『韓国の風水思想』(1984)や、戦前期に朝鮮風水の体系的な叙述を行った村山智順の『朝鮮の風水』(1931)においても、「水口」は重要な風水用語の一つとして説明されている。

崔昌祚(1984)によれば、風水地理思想において、「気」の集まる「穴」の周囲の地勢の中で、水が流入したり湧いたりする場所を「得」と言い、水が流出するポイントを「破」とし(図



図1 形勢学派風水による「理想の地形」

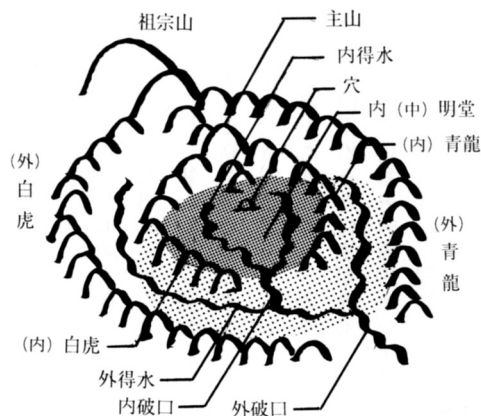


図3 「得」「破」と「水口」(崔昌祚、1997、作図は筆者)

3)、このうち「破」を「水口」とも呼ぶとしている。また図4に示すように、穴や明堂の周囲を囲む山々において、白虎側の山々が長く川が青龍側に曲流し、水口を成すものを「陰水口」、青龍側の山々が長く川が白虎側に流れて水口を成すものを「陽水口」に分類される例を示し、水口に関わるさまざまな細かい判断が存在することを示している。

村山（1931）は、『朝鮮の風水』において、

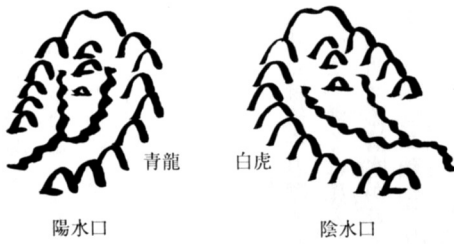
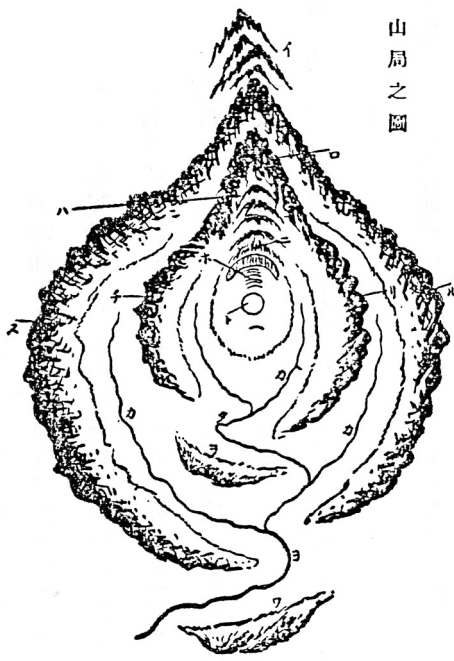


図4 陽水口と陰水口（崔昌祚、1997、作図は筆者）

水口を気の集まる良い場所である「穴」や「明堂」の周囲の河川の吉凶判断方法を示した「得水法」において取り上げている。そこでは、「局内の両水が合して流出する処を水口と言う」と説明している。また「風水の術語」について述べた部分で、「得(水口)」の項を設け、上述の「得」「破」の概念を述べ、さらには水口を「内水口」「外水口」に分類している（図5）。山局図は風水の理想図を示すとされ著名であるが、実はこの水口の説明部分に挿入されたものである。

風水説においては、このような水口は、穴や明堂に集められた良い「気」が散らばってしまわないようにするために非常に重要な地点である。朝鮮半島の風水説には「裨補」という、風水的な環境が不足する場合にそれを補強する考え方があり、水口に人工の樹林地を造営することもある。また風水による解釈はなくとも、水口に該当する地形は非常に重要な場所であるとも考えられる。図6は、崔昌祚（1990）による、風水用語をおり交ぜた伝統的な韓国農村の立地模式図である。このような村にアプローチしようとした場合、幹線道路から村への進入路に入



タヨカラナルマリチトヘホニハロイ
内外水朝案外外内内穴明眉頭入主祖
水水 青白青白 宗
口口 山山龍虎龍虎 堂砂鬚首山山

図5 山局之図（村山、1931）

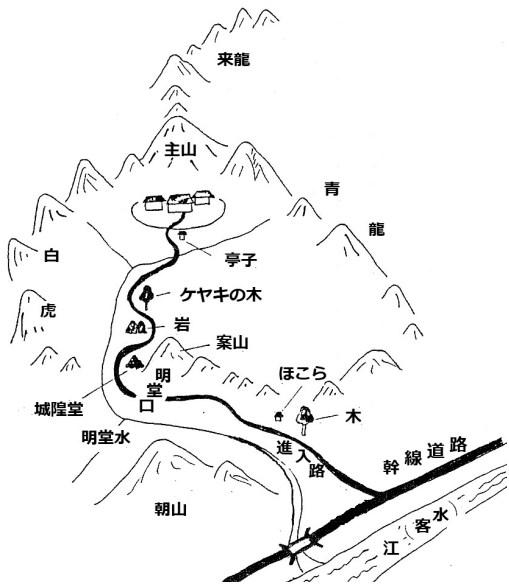


図6 韓国における集落と明堂の境界（崔昌祚、1990を翻訳）

り、やや地形の狭まった「明堂口」を通過して、家々のある開けた場所（明堂）に到達する。図中の「明堂口」がおおよそ本稿で主題とする水口に該当する。明堂口（水口）の周囲には城隍堂（ソナンダン）のような村祭りの祭祀施設があり、水口は民俗学的にも村の入り口として重要な場所であることが多い。水口に該当する場所は、そもそも朝鮮半島の集落のあり方から考えても重要であるとも言えるだろう。

3. 地誌と地理書などにあらわれる「水口」

朝鮮時代の地誌や地理書、あるいは古地図には、上記のような「水口」という概念が示されることがあり、そこから水口概念の特性の一端をとらえることができる。本章では、いくつかの朝鮮時代の代表的な地誌、地理書の記述を例に挙げて、これを検討してみたい。

水口について最も注目していると考えられる地理書が『挾里志』である。『挾里志』は『八域可居志』などとも呼ばれる著名な地理書であり、1751年に実学者李重煥によって著されている。その内容は、半島各地の地域性ととともに、士大夫が住むべき場所の条件を示したもので、その条件には風水地理思想の影響も色濃く表れているとされる。その構成は「四民総論」「八道総論」「卜居総論」「総論」の4つのパートから成っている。

このうち「卜居総論」においては、おおよそ住むに適した土地を占うには地理が第一である（大抵卜居之地、地理為上。）と説く。この「地理」は風水思想を多かれ少なかれ含んでいると言って良い。これに次いで生利、人心、山水が重要であるとする。最も重視する「地理」の項では、地理（環境条件）を見るには、第一に水口を見ることであり（何以論地理。先看水口。）、家の敷地を求めるためには水口がきっちり閉じられ、その中に広い平野が広がっているところを求めるべきである（故尋相陽基，必求水口関

鎖内開野處。）と記される。これは図2に示すような小盆地、しかも水口部分が狭まっている地形への評価ともいえる。また「水口関鎖」という語は、「水口にカギをかける」との表現であり、水口部分が極めて狭まっている、外からは見えない閉ざされた小盆地のような地形を評価しているとも言えるだろう。

このような水口への関心は、18世紀の農書『増補山林經濟』にも、より詳細な内容が確認できる。『増補山林經濟』は、洪萬選が17世紀末から18世紀初めに編纂された『山林經濟』を増補し、柳重臨が1766年に刊行したとされる農書である。その内容は農業や家庭生活に関する様々な知識をまとめたもので、その中に住まう場所を造営するための知識について述べられている「卜居^{ぼくきょ}」の項が存在する。

「卜居」の中には、さまざまな風水思想と関連する情報が記されているが、その中に「論水口」の項が設けられている。それによると、「水口は周密で水がみだりに流れ出て行かないのが良く、築山や土の台が有るべきで、これを羅星土という（水口貴於周密不放水走。凡水口有圓山土墩、謂之羅星土。）」と述べられる。

さらに年代が下って、19世紀前半にやはり実学者である徐有渠によって記された農書『林園經濟志』にもそのような内容が引き継がれている。この文献には「相宅志」が設けられ、「論水口」の項が記されるが、ここに記された内容は、上述の『挾里志』の文章と、『増補山林經濟』がそのまま引用されている。これを見ると農書のような実学的な書物で水口は強調され、その淵源の一部は『挾里志』に求められるように思われる。

このような水口の内容は、風水関連文献だけではなく、当時の地誌でも見る事が可能である。1530年に編纂された朝鮮時代の地誌『新增東国輿地勝覧』、漢城（ソウル）の項の記述によると、城内の水口に河川を挟んで南北一つ

ずつ築山が設けられているが、これは気を溜めるためのものである（假山 在都城水口内訓練院東北。一在水南一在水北。築土為山似畜地氣）とされる。このようにソウルの水口に該当する箇所もかなり早くから認識されていたことが理解される。やはりこの水口は、図2の模式図などと同様に小盆地から川が流出する場所である。またこの築山は現在残されていないが、図7のように1750年代の古地図には「五間水口」のすぐそばに描かれており（図中矢印）、その存在が確認できる。

また朝鮮時代末期1870年代に作成された地誌である「邑誌」には、各行政単位（郡縣）の情報が、おおよそ統一された項目ごとに示されるが、領域内の山や河川などが記される「山川」の項には、しばしば風水用語や概念が用いられる（澁谷，1995）。そして例えば表1のように「水口」も用いられることがある。

これをやや詳細に確認するならば、忠清道陰城においては、「台峰 縣南五里峙起廣野官門水口関鎖之地」とあり、この地域の台峰という山が、当時の行政拠点である「官門」の「水口関鎖」の場所にあたると示される。慶尚道眞寶の記事では「孤山 為水口桿門」とあり、『増補山林經濟』にも記された「桿門」の語が用いられる。さらには、慶尚道玄風の記事においては、「玉山 縣西周二里許官基水口自官植松禁伐」とあり、これは水口部分に松を植え伐採を禁止したという内容である。これは水口に何か



図7 都城図（1750年代）に見る漢城の水口と築山（李燦編（山田・佐々木・澁谷訳）『韓国の古地図』、2005より）

を造営して保護しようとする点で、前述の漢城（ソウル）の事例と類似していると言える。

これらの邑誌に見られる水口の記述は、全体として山、河川の説明文にあらわれ、その位置関係や地形形状等を示すために用いられた。同時に水口が、ある領域から河川が流出していく地点を示す語として用いられるとともに、前述の「水口関鎖」という表現が登場し、水口に樹木を植えるなどの行為も記録された。水口の横にあるべき小山を指す「桿門」など、さらに詳細な風水用語を用いて地形を説明しようとする例が見られる。

さらに「山川」の項ではなかったため、表1には入れなかったが、慶尚道清道では、風水用語を用いた自然環境条件の情報が、序文

表1 1871年邑誌山川条に見る「水口」に関連する記述の例

郡縣名	記述
京畿道永平	穿石山 永平漣川水口也。
忠清道陰城	台峰 縣南五里峙起廣野官門水口関鎖之地。
慶尚道眞寶	孤山 為水口桿門。
慶尚道玄風	玉山 縣西周二里許官基水口自官植松禁伐。
慶尚道清道	楡川 在郡南四十里即紫川與雲門川合處此為一邑之水口。
全羅道昌平	竹緑川 為本縣水口。
平安道義州	加豆等峴 一云如元嶺在府東四十里加山面東南。自駝駱山來為水口縣主脉。
平安道肅川	千佛山 在府西七里邑基之水口也。山南有千佛寺。



図8 『圻里志』「八道総論」にみる「水口」

に長く記されており、そこにも重要な地点として水口の情報が示される（渋谷、1995）。

このような「水口」概念を用いて、一定の地勢の様態を示すケースもある。上述の地理書『圻里志』のうち「八道総論」においては、朝鮮半島東南部の慶尚道地域の水系と地勢を説明するために、二つの山脈が金海（地名）で合わさり、七十州が同一の水口をもつ大きな局を形成している（両枝又大合於金海七十州同一水口作大局。）と記される。これは図8で見ると、本来比較的小さなスケールで用いられるはずの「水口」概念が、現在の慶尚南北道全体が入る広大な洛東江水系全体を表現するのに用いられている。

4. まとめ：「水口」概念の継続性と地域性

形勢学派の風水用語であった「水口」概念は、朝鮮時代の地理書、地誌などにも用いられ、本来は「気」の漏洩を防ぐ地形としての意味が強かったが、重要な水系の流出点を示すようになった。地誌、地理書に「水口」という用語が用いられるのは、他のものに比して多いわけ

はないが、管見の限り朝鮮時代中期の16世紀にはすでに見受けられる。また実学者の活躍した18世紀には、水口という表現はある程度定着していたのではないかと推測される。また、水口を意識することで、そこに至る「集水圏」あるいはそこを出入口としながら、山々に囲まれた小盆地をイメージする認識があったものと考えられる。また特に『圻里志』や『増補山林經濟』など実学者の業績に記されることから、実学者たちが何らかの契機で「水口」の重要性を認識していたとも推測される。

なお、現在の韓国においては、水口という用語が以前よりは多く用いられるようになっていくように思われる。水口は前述の例のように樹木を植えたり、築山を造成したりして風水的環境を微修正（裨補）する箇所である。1990年代以降、韓国においては、そのような場所に造成され、住民が保全維持していく「村の林」（「スグマギ＝水口塞ぎ」）の評価が高まったためではないかとも思われる。

このような状況は、おそらく1994年刊行の研究書『村の林』から始まったものと思われる。韓国においては水口に当たる地点に樹木を植え、築山を造ることが一般の村落でも行われてきた。そのように人工的な樹林地を村落で管理し、保全してきた点が評価され、現在も公的に顕彰される例もある。村の林の再評価を契機に、「水口」概念の再認識が起こり、歴史的に用いられた風水地理用語が現代まで継続されているとも言えるだろう。

また、「水口」の語は、中国の建築学者何曉昕（1995）などの著作によれば、中国東南部の歴史の古い村落では、「水口」を村の吉凶禍福に制約を与える場所として重要視し、橋や塔、あずまやなどを造営して「水口」を守ろうとするという（図9、10参照）。これについて何曉昕は「空間の広がりをも水口によって抑える（欲揚先抑）」という表現を示している。



図9 中国福建省農村の水口にある造営物
(2019、筆者撮影)



図10 中国福建省農村の水口に作られた寺院
(2019、筆者撮影)

また同様に、何曉昕によれば、中国の著名な風水書にはさまざまな「水口」に関する言及があるという。「水口と村落の距離が大きいものを「大地」と呼び、次いで「中地」、「一山一水人材之地」という『入地眼図説』巻七水口)などの表現や、「平野が広がり、高山大嶺がないところには、捍門、華表を立てて水口を鎮護し、水を屈曲させて流す」(『地理五訣』)などがその例である。

これらの記述を見ると、朝鮮半島の事例と同じく、領域の認識に「水口」概念が用いられていることが分かる。またその重要性は韓国の例より高いように見受けられる。反面、このような認識は沖縄・日本本土には弱く、朝鮮半島と対比してもやや認識が異なるとも言えるかもしれない。

このように、「水口」概念は朝鮮半島だけで

はなく、風水地理思想が伝播した東アジア各地域には存在し、共通性を持ちながらも地域的相違を見せている。このような点は、東アジアにおける風水地理思想の「地域性」を示すものである。「水口」などの風水用語を手掛かりに、このような地域性について検討することを今後の課題としたい。

【参考文献】

- 何曉昕（三浦國雄監訳）（1995）：『風水探源』、人文書院
- 韓国学文献研究所編（1987）：『韓国地理志叢書 邑誌二十 慶尚道④』、亜細亜文化社
- 韓国学文献研究所編（1983）：『韓国地理志叢書 全国地理志新增東国輿地勝覽②』、亜細亜文化社
- 金学範・張東洙（1994）：『村の林』（韓文）、悦話堂
- 保景文化社編（1983）：『林園経済志（五）』、保景文化社
- 崔元碩（1990）：『よい地とはどこを言うのか 韓国風水の理論と実際』（韓文）、ソヘムンジブ
- 崔昌祚（三浦國雄監訳、澁谷鎮明・李在浩共訳）（1997）：『韓国の風水思想』、人文書院
- 澁谷鎮明（1995）：朝鮮半島における風水地理説を用いた地形認識、歴史地理学37-3, p 1-15
- 澁谷鎮明（2003）：韓国農村における林藪と裨補一風水による解釈と樹林地の管理一、(石原潤編『農村空間の研究（下）』, 2003, 大明堂), p413-428
- 澁谷鎮明（2005）：朝鮮時代の地誌・地理書にあらわれる風水用語とその概念, 2005, 歴史地理学47-1, pp.64-84
- 澁谷鎮明（2017）：東アジアにおける風水の地域的差異、地理の研究197, pp.63-71
- 朝鮮研究会（1915）：『茶山鄭若鏞原著 山林經濟 全（一名朝鮮博物誌）』
- 村山智順（1931）：『朝鮮の風水』、朝鮮総督府
- 李燦（1991）：『韓国の古地図』（韓文）、1991, 汎友社
- 李燦編（山田・佐々木・澁谷ほか訳）（2005）：『韓国の古地図』（英・日翻訳版）、汎友社
- 李重煥（平木實訳）（2006）：『扱里志 近世朝鮮の地理書』、東洋文庫